

平成27年度 国語 (50分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は24ページである。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始の合図前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
 - ・①氏名欄
氏名を記入すること。
 - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

1

次の文章を読んで、後の問1～問4に答えよ。なお、本文上の数字は行数を表す。

国

語

（解答番号

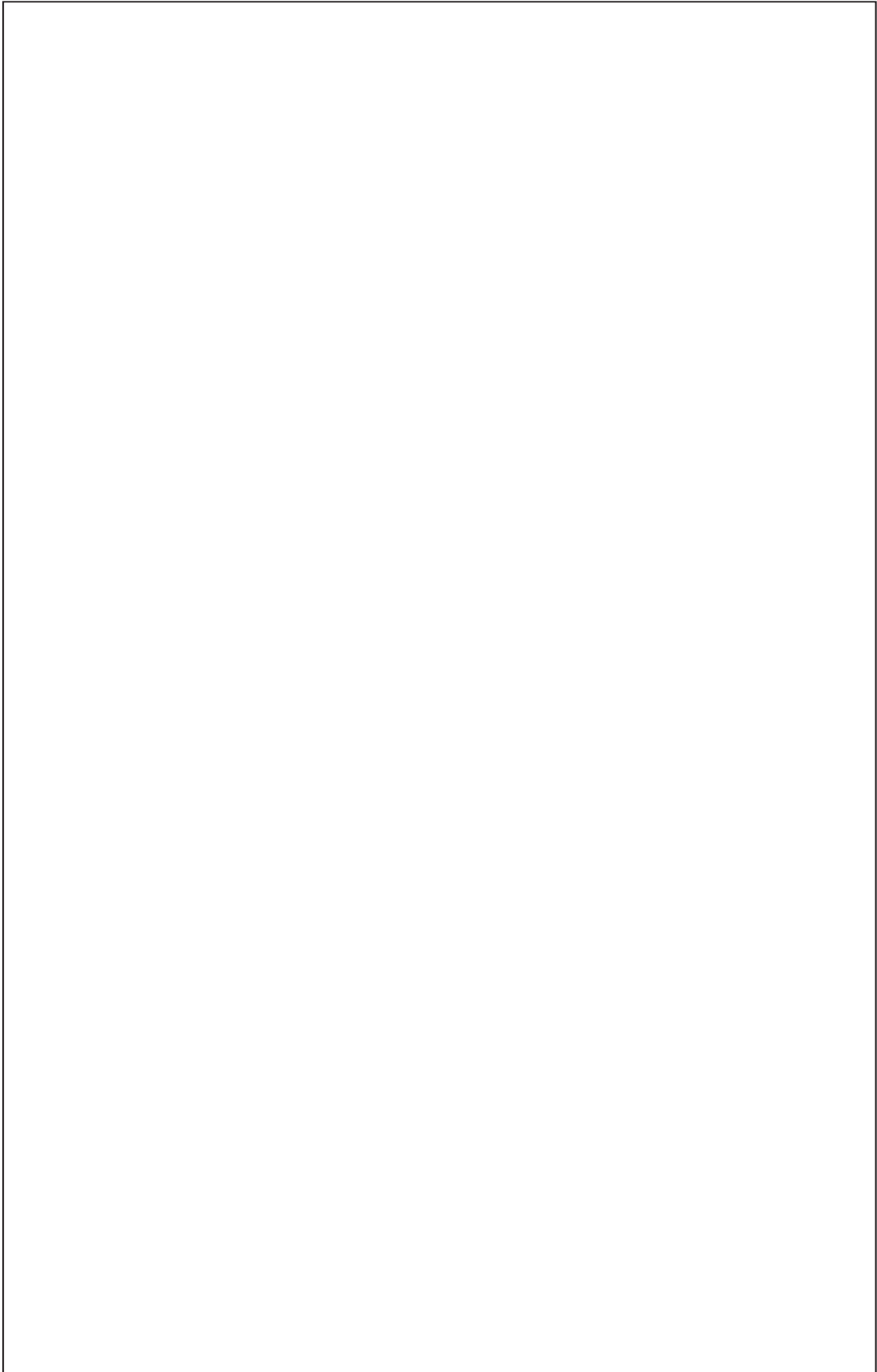
1

）

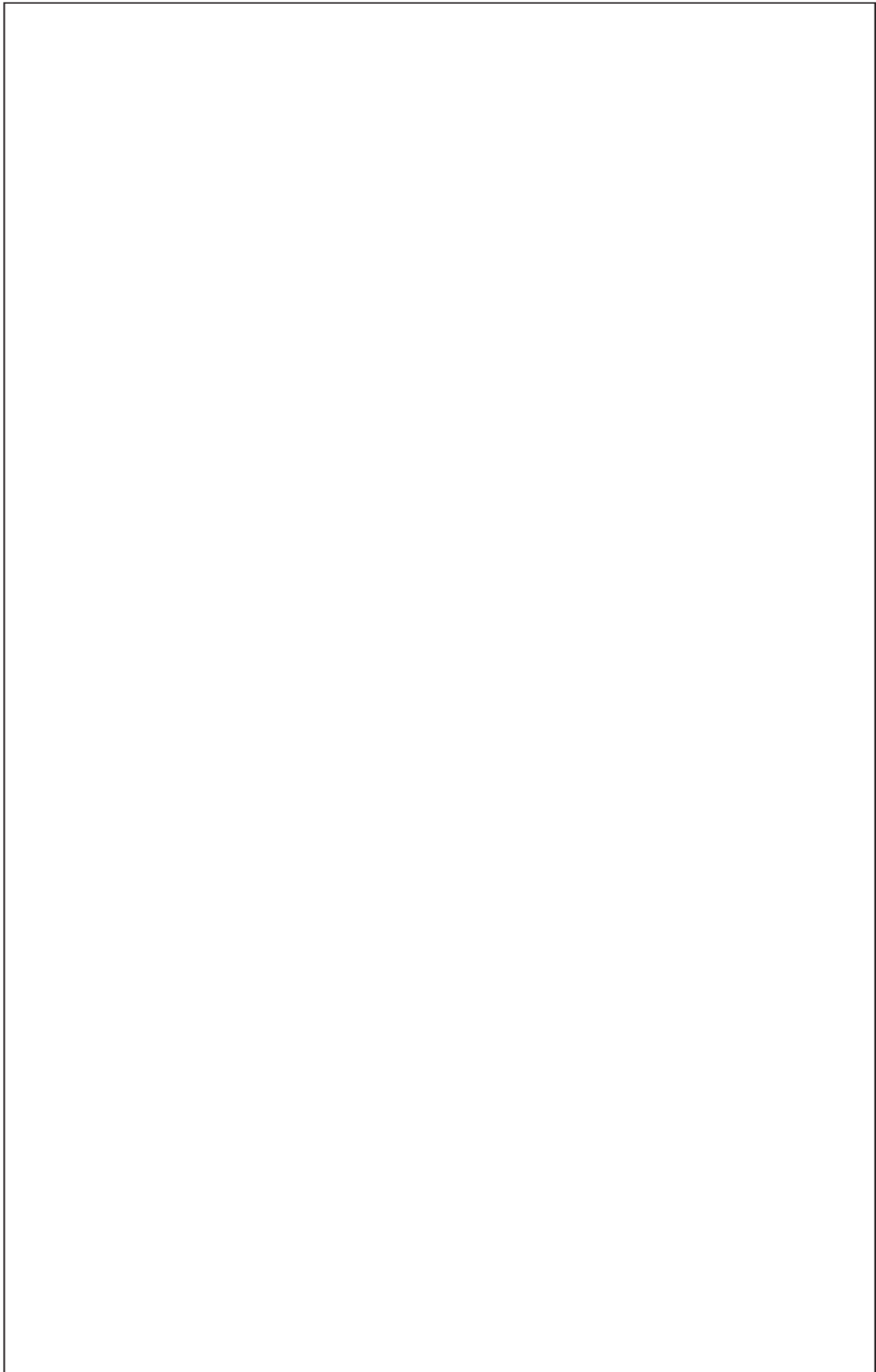
27

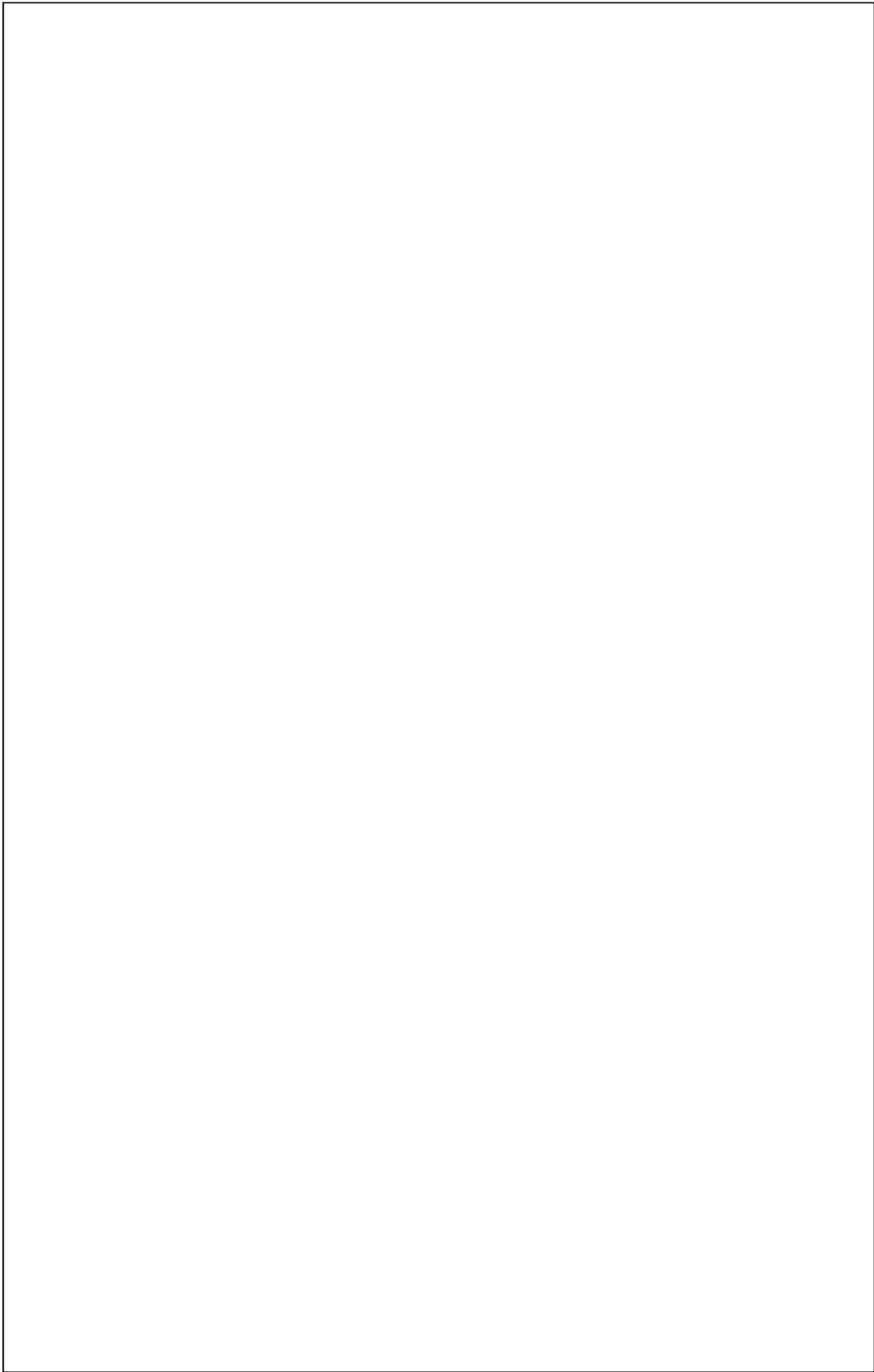
（

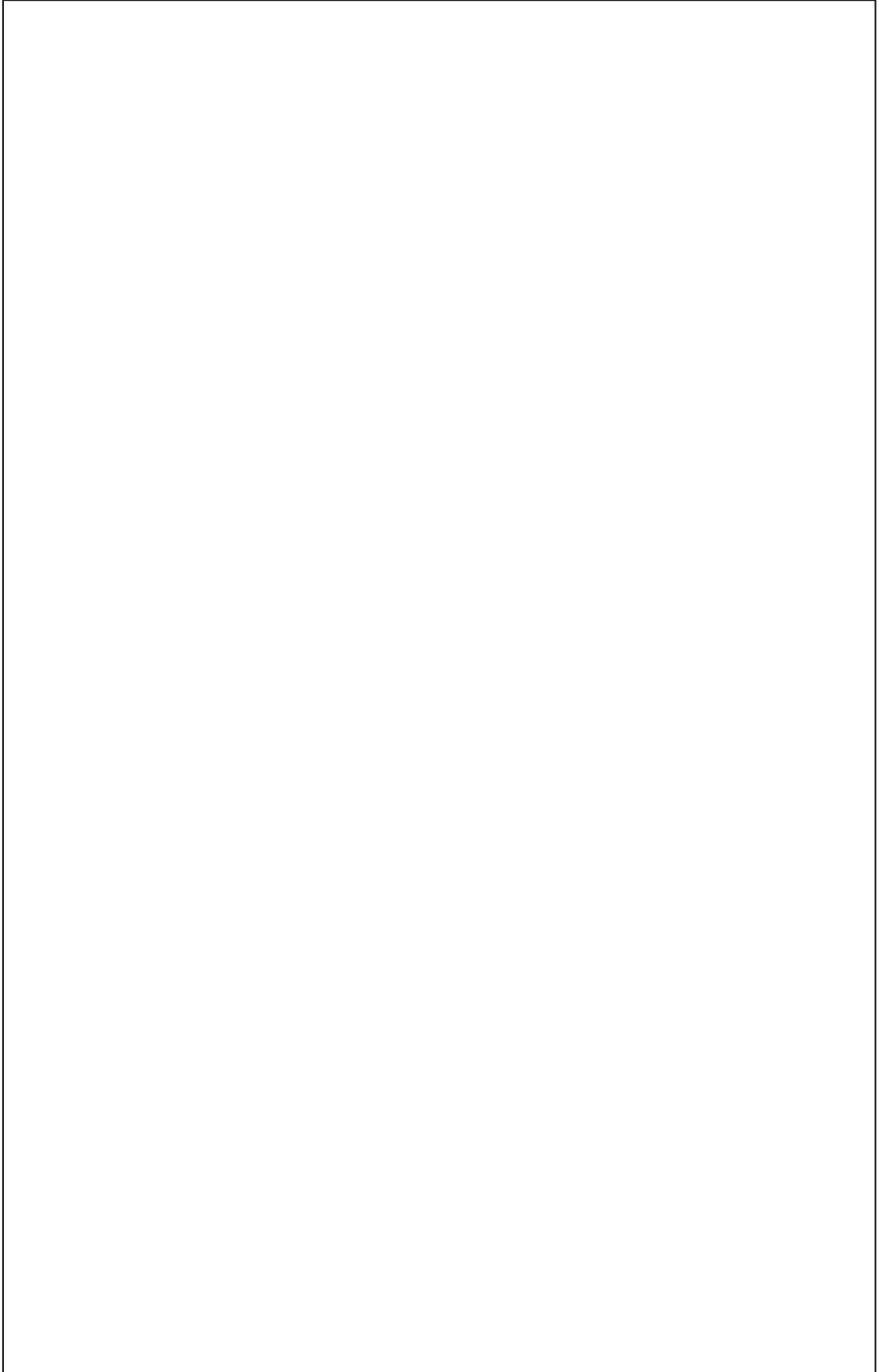




(はらだみずき『ここからはじまる』による。)







問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 1 ～ 5。

(ア) 興奮 1

⑤ きょうふん
④ こうふん
③ きょうだつ
② ごうだつ
① きょうしん

(イ) 漏らした 2

⑤ ゆ(ら)した
④ た(ら)した
③ も(ら)した
② めぐ(ら)した
① おく(ら)した

(ウ) 挟んだ 3

⑤ はら(んだ)
④ か(んだ)
③ つぐ(んだ)
② はさ(んだ)
① さしこ(んだ)

(エ) 途端 4

⑤ とたん
④ ほったん
③ みちばた
② とちゅう
① よたん

(オ) 次第 5

⑤ したい
④ じだい
③ じてい
② してい
① しだい

問2 傍線部A 勇翔の目がうつろに泳いだ。とあるが、このときの勇翔の気持ちはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 結果を繰り返し尋ねる父の質問に対して、自分の最善は尽くせたはずであるという確かな手ごたえを感じており自信を持っている。
- ② 自分でも合格したとは思っていないが、最初から不合格だと一方的に決めつけている父の横柄な態度を不愉快だと思っている。
- ③ 合格していると思うのかと重ねて父親から尋ねられたが、自分で判断できることではないためどう答えればよいのか困惑している。
- ④ 自分では合格したとは思っていないが、その場をしのぐために本心とは異なる返答をしたことを父に疑われて動揺している。
- ⑤ 父の質問をきっかけに一次セレクションの結果が気になり、発表を今すぐにも見に行きたいとそわそわした状態になっている。

問3

傍線部B ここからはじまるんだ、傍線部C ここからはじまるんだとあるが、それぞれの発言時における拓也について説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7

① 傍線部Bはセレクションに落ちた悔しさを忘れずに頑張つてほしいと勇翔を応援しており、傍線部Cはこのお弁当を食べ終わったらすぐにも練習を始めようと意気込んでいる。

② 傍線部Bはサッカー選手になる夢を諦めきれない勇翔の多難な将来を哀れんでおり、傍線部Cはどんなことがあっても家族の一員として勇翔を支えていこうと覚悟を決めている。

③ 傍線部Bは勇翔のサッカーに対する考えにまだ妥協が見られることにいらだっており、傍線部Cは確固たる信念を持って競技に取り組むと約束した勇翔の再出発に強く期待している。

④ 傍線部Bは叱咤した自分に向かって敵意をむき出しにする勇翔をたしなめようとしており、傍線部Cは父と息子の間で交わした約束に同調する妻や姉を頼もしく思っている。

⑤ 傍線部Bは未熟ながらも夢に向かって本気で取り組む決意を示した勇翔を励ましており、傍線部Cはそれに加えて愛する息子を家族で支えたいという思いも伝えようとしている。

問4 あるクラスではA班からE班に分かれ、それぞれの班でこの文章の表現の特徴とその効果について気が付いたことを話し合い、その後発表し合うこととした。次はそれぞれの班が発表した内容と、発表を聞いた後の生徒たちの意見である。Zさんの発言中の空欄に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

【班の発表の内容】

A班 「私たちの班では、『……』と『……』の記号の使い分けについて注目しました。例えば7行目『うん……』や41行目『……』——わかった』などの表現です。これらの記号はいずれも勇翔の会話にしか用いられておらず、発言の後半をほかすときには『……』を、発言の前半をほかすときには『……』を用いることで、勇翔の優柔不断な性格を読者に印象付けていると思います。」

B班 「私たちの班では、お弁当に関係する表現に注目しました。61行目『運動会のとくときと同じように彩りよく、にぎやかだった』や120行目『恵里は黙って、爪楊枝に刺さった車エジのベーコン巻きを弟に差し出した』などの表現からは、心情を直接表す言葉がなくても母や姉の勇翔に対する愛情や優しさがうかがえると思います。」

C班 「私たちの班では、116行目『冬枯れした芝生のところどころに、緑の新芽が顔を出しはじめていた』という表現に注目しました。セレクトションで不合格になったことで、自分と向き合い、本気で競技に取り組むことにするという決意を勇翔から引き出した拓也の、息子に対する期待が、『緑の新芽』という描写とうまく重なっていると思います。」

D班 「私たちの班では、拓也たち以外の家族に関する表現に注目しました。例えば1行目『ほかの親子の姿もあった。興奮気味にミニゲームの話を母親に語りかける子供もいた』や80行目『少し離れた場所でボールを蹴りはじめた親子の笑い声が、風に運ばれてきた』などの表現です。場面設定に臨場感を与えるだけでなく、他の家族との対比で、拓也たち家族のやりとりを読者を引き込む効果を生んでいると思います。」

E班 「私たちの班では、身体部分を用いた表現に注目しました。例えば36行目『勇翔は唇をとがらせるようにした』、73行目『嗚咽で言葉がつながらず、肩が震えた』などの表現です。これらの表現によって、勇翔の心理が場面の様子とともに読者に伝わりやすくなっていると思います。」

【生徒たちの意見】

Xさん 「このようにいろいろな意見を聞くと、自分たちだけでは気が付かなかった様々な見方をすることができるのだな、と感じました。」

Yさん 「興味深い発表が多かったですね。どの班も根拠を明確にして表現の特徴とその効果を説明できていたと思いました。」

Zさん 「そうですね。私は の発表は、その根拠が本文から読み取れず、説得力に欠けていると思いました。」

- ⑤ E班
④ D班
③ C班
② B班
① A班

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

(注1)(注2) 凡兆の取り合わせの句は芭蕉の取り合わせの句とは違い、現実のもの同士が和音のように響きあって句い立つような世界を描き出す。凡兆と出会ったとき、芭蕉はすでに古池の句を詠んで蕉風に目覚め、現実と心の世界をユウゴウする(ア)という試みを続けていた。凡兆を『猿蓑』(注4)の撰者の一人に抜擢したのも、自分にはないこの凡兆の世界を評価したからにちがいない。ただ凡兆の取り合わせの句がみな現実という同じ次元のものとはいっても、異質のもの同士を調和させるという取り合わせの大原則はしっかりと守られている。霰と鮒売、時鳥と門、髪剃と雨というふう(イ)に。この点では芭蕉の句も凡兆の句も変わらない。

ところが、現代の私たちが取り合わせの句を詠もうとすると、なかなかこうはゆかない。というのは、多くの人が異質なものを同士を調和させるのではなく、同質のもの、似たもの同士を並べるのが取り合わせと勘違いしているからである。たとえば、「下駄の歯につく小田の土」という句ができたとしても、その上に「春雨や」とか「たんぽぽや」と置いてしまう。

春雨や下駄の歯につく小田の土

たんぽぽや下駄の歯につく小田の土

一見、立派な句のような顔をしているが、どちらもこれでは取り合わせとはいえない。というのは、「春雨や」と置けば、ああ、春雨で土がゆるんで、それで下駄の歯についたのだなと理屈で納得してしまう。また、「たんぽぽや」でも土をすぐ連想するので、これも付きすぎといわねばならない。

A どちらもケーキに羊羹を添えたような句なのだ。しかし、そのことに誰も気づかない。それどころか、似たもの同士を並べることこそ取り合わせと勘違いして、似たものを探すのに躍起になっている。「朝日俳壇」や「NHK俳句」の場合、一度に数千句の俳句を選句するのだが、取り合わせを勘違いした句に次々に出会うことになる。これでは芭蕉の句はおろか、凡兆が「鶯や」と置いたときのような高らかでホガらかな世界は何年待とうが出現するはずがない。

これはいったいどうしたことだろうか。

妻の着物選びにたまに付き合わされることがあるのだが、ヤツカイなのは帯合わせである。着物の生地が決まって、さて、それにどんな帯を合わせ

るかという段になると、やや険悪な空気が流れる。というのは、呉服店の主の出して見せる帯が、ことごとく着物と似たような色のものばかりだからである。着物にそれと似た色合いの帯を合わせると、何というか、めりはりがなくなつて全体がぼんやりしてしまう。これが気に入らない。

「もう少し違う色の帯はありませんか」

「いや、この生地にはこの色でない」と

しまいにはこちらも店の主も疲れ果てしまい、そこらに広げた何本もの帯を見下ろして、

「では、帯はまた今度にしましょう」ということになる。

こんなことが何度かあると、着物業界全体に着物と帯は同じ調子で合わせるものという固定観念が蔓延して（まんえん）いるのではないかと疑ってしまう。いつだったか、伊豆山の旅館、蓬菜（ほうさい）のおかみにその話をすると、おかみはこんなことをいった。

「あら、同じ色のものを合わせるといふのは洋服の色の合わせ方なんですよ」

なるほど、そう考えれば納得がゆく。たしかに洋服の場合、同系色同士を合わせるほうが無難であるうえにシックにまとまる。ブラウンのスカートにベージュのセーター、グレーのスカートに黒のカーデigan、男の場合も紺のパンツにライトブルーのジャケット、靴が茶色ならベルトも茶色にそろえなさいなどという。逆に異なる系統の色や、まして反対色を合わせるのは危険であり、できれば避けるべきだとケイコクする（ケイコク）^(E)。それは西洋の服装の長い歴史の中で生み出されたひとつの原則であるにちがいない。

ところが、昔の日本にはこれと異なる正反対の色の流儀があった。室町時代や江戸時代の屏風（びょうぶ）や浮世絵などを眺めると、そこに描かれている人々のまわっている衣装は相容れない色同士の組み合わせであり、西洋の原則からすると禁じ手の色合わせがあふれている。

江戸時代の前期、浮世絵の開祖といわれる菱川師宣（ひしかわのしげのぶ）が描いた「見返り美人図」を見ると、どこへゆくところだろうか、そそくさと歩んでゆく後ろ姿の女は桜や菊の模様の紅の着物に鮮やかな緑の帯を低く結んでいる。袂（たもと）と裾からは白い襦袢（じゆばん）^(注7)がのぞき、肩にはゆるく結った黒髪を垂らしている。異質の色同士の鮮やかな取り合わせといわなければならない。

同じところに描かれた「彦根屏風」^(注8)には六曲一隻の金地に遊樂に耽（たも）る十五人の人物が描かれているのだが、その衣装の大胆な模様と斬新な色使いには目を見張るばかりである。小さな犬を連れた若い女の着ている小袖は絞り染めとみられる朱や黒の大きな雪輪（ゆきりん）^(注9)を散らしてある。女を相手に盤双六（バックギャモン）に興じる若者は黒い着物に鼠色（ねずみ）の細帯を締め、朱塗りの脇差（わきざし）を差している。袖口からちらとのぞく襦袢も朱色である。ここには西洋でツチカわれた洋服の配色とはまったく異なる原則でちりばめられたさまざまな色が人々の衣装や道具に躍動している。

昔の日本人の色合わせが今のように同系色ばかりでなく、むしろ異質の色同士を大胆に組み合わせるものであったことがもつとよくわかるのは王朝

(注10) 時代の襲の色目だろう。これは宮中に入出入りする貴族たちの、いわば衣装の色彩についての約束であり、何枚かの衣を重ねて着るときの外と内、上と下、表地と裏地の色が季節により、身分により、行事によって細かく定められていた。

もちろん、同系色のものもあるのだが、ひとときわ目を引くのは異なる系統の色同士を合わせた襲の色目である。たとえば、春の桜の襲は白の表に紅の裏、夏の杜若かきつばたの襲は紫の表に萌黄もへぎの裏、秋の黄菊きぎくの襲は黄色の表に青の裏だった。どれも四季折々に咲く花の風情を色で写し取っているのだが、このようにして取り合わせたさまざまな色が女や男たちの襟元や袂からこぼれるさまはどれほど華やかであり、奥ゆかしくもあつただろうか。

試しに自分でやってみればすぐわかることだが、大胆な色の組み合わせは、それを作り出す人間の側に自信と活気がなければ、決して生み出せない。それに対して、おとなしい同系色の組み合わせは当たり前障りのない無難なものを求めるときに生まれる。古い日本の絵画に描かれた人々のまとうている衣装が大胆な配色のものであるということは、当時の人々が上は雲上人うんじょうびとから下は遊女にいたるまで自信と活気にあふれていたということでもあるだろう。現代の着物に蔓延している同系統の色を合わせるという流儀が洋服の発想であるなら、日本人は明治維新以降、西洋文化を学ぶうちに異なる系統の色を大胆に取り合わせる日本古来の色彩感覚を麻痺まひさせ、失ってしまったことになる。

これは何も色だけの問題ではない。日本人は明治時代以降、近代化(西洋化)に夢中のあまり、異質なものの同士の調和という、本来の和の姿を見失ってしまった。そして、万事において同質のもの同士が馴れ合っているのを和と勘違いするようになってしまったということである。赤には赤系統の色でないと合わないと考える。俳句では似たもの同士を取り合わせる。人間関係においても考え方が同じでなければ友だちにはなれないと考えている。それは今の日本人が昔の日本人のもっていた自信と活気を失ってしまったということでもあるだろう。

(長谷川權『和の思想』による。)

(注1) 凡兆——江戸中期の俳人。芭蕉に師事した。

(注2) 取り合わせの句——物と物、素材と素材を取り合わせて作られた俳句。

(注3) 蕉風——松尾芭蕉およびその流派の俳風。

(注4) 『猿蓑』——江戸中期の俳諧集。

(注5) 小田——小さな田。

(注6) 鶯や——凡兆に「鶯や下駄の齒につく小田の土」の句がある。

(注7) 襦袢——和服のはだ着。

- (注8) 六曲一隻——六枚に折りたたむことのできる屏風一組。
- (注9) 雪輪——雪片の六角形をまるくかたどって図案化したもの。
- (注10) 襲——衣服を重ねて着るときの、衣と衣との配色、または衣の表と裏との配色。

問1 傍線部(ア)～(オ)に当たる漢字を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は

、

(ア) ユウゴウ

- ⑤ ④ ③ ② ①
誘 湧 融 幽 裕

(エ) ケイコク

- ⑤ ④ ③ ② ①
刑 警 啓 敬 契

(イ) ホガらか

- ⑤ ④ ③ ② ①
朗 多 麗 安 円

(オ) ツチカわれた

- ⑤ ④ ③ ② ①
払 遣 培 扱 担

(ウ) ヤツカイ

- ⑤ ④ ③ ② ①
薬 病 益 訳 厄

問2 傍線部A どちらもケーキに羊羹を添えたような句なのだ。 とあるが、それはどういふことか。最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 「春雨や」や「たんぽぽや」で始まる句はどちらも非現実のものと現実のものが和音のように響き合う世界を描いた句だということ。
- ② 「春雨や」や「たんぽぽや」で始まる句はどちらも「土」をすぐに連想できる同質のものを並べた取り合わせの句だということ。
- ③ 「春雨や」や「たんぽぽや」で始まる句はどちらも西洋的なものと日本的なものを並べたり調和させたりした句だということ。
- ④ 「春雨や」や「たんぽぽや」で始まる句はどちらもケーキや羊羹のように甘く感傷的な言葉を並べただけの句だということ。
- ⑤ 「春雨や」や「たんぽぽや」で始まる句はどちらも春のおとずれをはつきりと感じさせる言葉が入りすぎている句だということ。

問3 傍線部B なるほど、そう考えれば納得がゆく。 とあるが、それはどういふことか。最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 着物業界の人間が服の色を反対色で合わせようとするのは、同系色で合わせようとする洋服の発想に対抗しようとするものであるとわかったということ。
- ② 着物業界の人間が着物と帯を正反対の色で合わせようとするのは、西洋の服装の長い歴史を学んでいるからであるということがわかったということ。
- ③ 着物業界の人間が着物と帯を反対色で合わせようとするのは、日本の文化と西洋の文化を別物と考えているからであるということがわかったということ。
- ④ 着物業界の人間が服の色を同系統で合わせようとするのは、着物の歴史の中で生み出された原則に基づくものであるからしかたがないとわかったということ。
- ⑤ 着物業界の人間が着物と帯を同系色で合わせようとするのは、洋服の色の合わせ方の発想が浸透しているからであるということがわかったということ。

問4 傍線部C 日本古来の色彩感覚を麻痺させ、失ってしまった とあるが、その理由を筆者はどのように考えているか。最も適当なものを、次の

① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

① 西洋文化を受け入れていく中で西洋の合理的なものの考え方を学んだ日本人は、それまでの日本の伝統的な自然観を否定するようになってしまったから。

② 洋服で過ごすことの便利さにあまりにも慣れすぎてしまった日本人が、着物を着るという習慣を失い着物の色合わせの伝統をなくしてしまったから。

③ 西洋文化を受容するうちに無難な同系色を組み合わせることに慣れてしまった日本人が、大胆な色の組み合わせを作り出す自信と活気をなくしてしまっただから。

④ 西洋文化の流行とともに無難な色使いを好むようになった日本人は、昔の日本人のような大胆な色使いを時代遅れと見なすようになってしまったから。

⑤ 同系色を組み合わせる西洋の色使いを知った日本人は、そこにこそ日本古来の和の姿があると考え、大胆な色合わせを拒絶するようになってしまったから。

問5 本文の内容に合致しているタイトルとして最も適当なものを、次の① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

① 和の姿を見失った日本人

② 和の伝統を守る日本人

③ 異質のものとの調和を好む現代人

④ 取り合わせの句の作り方

⑤ 色彩感覚における近代化

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

三人各郷土を棄てて、一樹の下に至り会へり。相共に同宿せり。時に一人問ひて云はく、汝等は、何なる人の、何の処より去りて、何の国より来れるや、と。皆、互ひに問ひ答へて云はく、生活せむが為に家を離れて東西するのみ。吾等三人各三世の因感有りて、一樹の下に宿れり。故に断金の契を結びて、全く永代の昵びを期せむ。其の長けるをば父と為し、小年なる二をば兄弟と為す。桂蘭の心恒に芳しく、膠漆の語ひ弥深し。財を求め得ては、彼此を別たす、父に孝養すること猶骨肉に踰えたり。

爰に父、子等の心を試みむと欲て、二の子に語りて云はく、我河の中に舍を建て、以て居処と為む、と。二の子教へを奉じて土を運び、河を填めて、入る毎に漂流して波浪に溺る。三年を経と雖も填め作ることを得ず。爰に二の子吟きて云はく、我等不孝と成りぬ。父の命に叶はず。海中の玉豈誰が為にかせんや。(注5) 世上の珍復誰の為ならんや。未だ小さき舎を造らず。我等人と為むや、と。憂歎して寝ねたる夜の夢に、一人有り、壤を持ちて河の中に投ぐと見る。明旦に之を見るに、河の中に土を填むること数十余丈、屋を建つること数十宇なり。之を見聞く者、皆共に奇しみて云はく、大いなるかなや。孝養に天神感応して河の中に岳を為りて、一夜に舎を建てて父をして安置せしむ、と。天下に之を聞きて嘆思せずといふこと莫し。其の子終に生長して五位と為り、二千石と名づく。(注8) 食口三十有余、三州を以て姓と為す。夫れ親父に非ずと雖も、丹誠を至さば神明の感近く在り。況んや骨肉をや。

(『注好選』による。)

(注1) 因感有りて——ここでは、宿縁のなせるわざで、という意味。

(注2) 昵びを期せむ——親しい交際を誓おう。

(注3) 桂蘭——桂も蘭も共に芳香を放つ木。

(注4) 彼此を別たす——あれこれ分けてそれぞれ自分の物とすることなく。

(注5) 世上の珍——世の中の宝物。

(注6) 数十余丈——一丈は約三メートル。

(注7) 数十宇——数十軒。

(注8) 二千石——地方長官の呼び名。

(注9) 食口——ここでは家族・親族の意。

問1 傍線部A 東西するのみ とは、どのような意味か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 各方面に助けを求めているだけです。
- ② 身動きできず途方に暮れるばかりです。
- ③ 人に追われて逃げ回っているだけです。
- ④ あてもなく放浪しているだけです。
- ⑤ どこを旅しても毎回道に迷ってばかりです。

問2 傍線部B 膠漆の語ひ の「膠漆」とは一般に粘り気のある接着剤や塗料を指すが、「膠漆の語ひ」とほぼ同じ意味を持つ故事成語として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 水魚の交わり(親密で離れがたい友情。)
- ② 呉越同舟(仲の悪い者同士が同じところにいること。)
- ③ 他山の石(自分を磨くのに役立つ他人のよくない言行。)
- ④ 糟糠の妻(貧しくて苦しかった時からともに苦労した妻。)
- ⑤ 墨守(自説をかたくなに守り通すこと。)

問3 傍線部C 我等人と為むや とあるが、そのように言った理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20。

- ① 自立しようと親に反抗ばかりしてきたのに、結局小さな河を埋め立てることさえもできていないから。
- ② 子が親に孝行するのは人として当たり前のことなのに、自分たちは父の願いをかなえることもできないから。
- ③ 命がけで父の願いをかなえようとしているのに、いまだに海の中の宝物を手に入れることができないから。
- ④ 父は自分が就きたい仕事に就いてよいと言ってくれたのに、いつになっても仕事を見つけれないから。
- ⑤ 宝物は家族みんなに分けるのが当然なのに、子供たちだけで分けてしまつて親には渡していないから。

問4 傍線部D 皆共に奇しみて とあるが、人々は「奇し」んだ結果、どのように考えたのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は

21。

- ① 天の神が子供たちの行いに感心し、国中の人に命じて河の中に家を建てさせたと考えた。
- ② 父親が子供たちのふがいなさにあきれ、自ら河を埋め立てて家を建てたと考えた。
- ③ 子供たちが父親の愛情に応え、自分たちで河を埋め立てて家を建てる夢を見たと考えた。
- ④ 父親が子供たちの気持ちに感激し、子供たちのために河の中に家を建てたと考えた。
- ⑤ 天の神が子供たちの思いに動かされ、河の中に丘をつくつて家を建てたと考えた。

問5 この文章の表現の特徴について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

22。

- ① 家族のありふれた日常を、色彩豊かな表現を使いながら巧みに描いている。
- ② 親に孝行すべきだという教訓を、漢語を利用しながら簡潔に書き表している。
- ③ 歴史上の人物の姿を、和語を多用しながら生き生きと描き出している。
- ④ 天の神が人間と交流する様子を、風景描写を用いながら幻想的に述べている。
- ⑤ 父と子の心の複雑なありようを、会話文を交えながら明快に表している。

4

次の文章を読んで、後の問1〜問5に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

唐の皇帝である太宗に、口先がうまくてこびへつらう臣下を排除するために、怒ったふりをして群臣を試すように進言した者があった。そのことについて太宗は、自分の考えを宰相である封徳彝に語った。

帝謂封徳彝曰、「朕聞『流水清濁、在其源也。』君者政、人庶猶

君自為詐、欲臣下行直、是猶源濁而望水清。理不可得也。朕常以

魏武帝多詭詐、深鄙其為人。此言豈可堪為教令。」謂上書人曰、「朕

欲使大信行於天下。不欲以下詐道訓俗。卿言無謂。朕所不取也。」

(『貞観政要』による。)

- (注1) 人庶——万民。
- (注2) 魏武帝——魏の国の王。
- (注3) 詭詐——いつわりあざむくこと。
- (注4) 鄙——軽蔑する。
- (注5) 上書人——太宗に進言した人。
- (注6) 卿——あなた。

問1 空欄 A、B のそれぞれに当てはまる語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

- | | | |
|---|------|------|
| ① | A 源 | B 清濁 |
| ② | A 水 | B 源 |
| ③ | A 源 | B 水 |
| ④ | A 清濁 | B 流水 |
| ⑤ | A 流水 | B 水 |

問2 傍線部C 理 不可得也。とは、どういう意味か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① どうしても受け入れられない道理である。
- ② 人民にとって何の得もない理論である。
- ③ 誰にとっても分かりにくい真理である。
- ④ 臣下にとって大変迷惑な理屈である。
- ⑤ とても実現できそうにない理想である。

問3 傍線部D 此言豈可堪為教令。とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 25。

- ① 太宗は群臣をいつわって試すという方法を、理想の政治を実現させるためには行ってみる価値があると考えたから。
- ② 太宗は武帝が人民の裏切りに苦しんできたのを知っているので、武帝と同じ目にあうことにはとても耐えられないから。
- ③ 太宗は本心をいつわってこびへつらう群臣に、自分の行う政治が間違っていないか正直に話してほしいと強く願ったから。
- ④ 太宗は人をだますという行為を軽蔑していたので、人民をいつわって国を治めるという方法は受け入れられないから。
- ⑤ 太宗はかつて仕えていた武帝から試されたときに、軽蔑すべき人間だと判断されたという苦い経験を忘れていないから。

問4 傍線部E 欲 使 大 信 行 於 天 下 は「大信をして天下に行はれしめんことを欲す」と読むが、返り点のつけ方として最も適当なもの

を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 欲_レ使_二大 信 行 於 天 下_一
- ② 欲_下使_二大 信 行_レ於 天 下_上
- ③ 欲_下使_二大 信 行_中於 天 下_上
- ④ 欲_三使_二大 信 行 於 天 下_一
- ⑤ 欲_レ使_三大 信 行_二於 天 下_一

問5 この文章の内容に合致しているものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 太宗は人民から信頼されるためには封徳彝を排除すべきだと考え、進言を受け入れることにした。
- ② 封徳彝は武帝を信頼していなかったため、進言の受け入れを拒否するよう太宗にすすめた。
- ③ 太宗は人民の手本となることが為政者として大切だと考え、そのことを封徳彝に伝えた。
- ④ 封徳彝はいつわりの多い太宗の人柄を常に軽蔑していたが、本心を隠して忠実に仕えていた。
- ⑤ 太宗はこびへつらう家臣たちを反省させるために、みせしめに封徳彝を責めた。

